

論文審査の要旨

| | | | |
|---|----------------|----|-----------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 （ 教育学 ） | 氏名 | 中 村 喜 久 江 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第①・2項該当 | | |
| 論 文 題 目 子どもの食物選択力の形成過程に関する研究 | | | |
| 論文審査担当者 主 査 教 授 伊藤 圭子 審査委員 教 授 望月 てる代 審査委員 教 授 木原 成一郎 | | | |
| 〔論文審査の要旨〕 本研究は、小学校家庭科を対象に、マルザーノらの「行動モデル」、「学習の次元」を援用して、食物選択力形成のための授業モデル及び教材を開発し、授業研究を通してそれらの授業モデル及び教材の有効性と食物選択力形成過程を明らかにすることを目的とする。論文は、7章から構成されており、各章の内容は次の通りである。 序章では、家庭科における栄養教育の重要性について述べ、先行研究を検討して問題点を明確にし、本研究の目的及び研究方法を述べている。家庭科における栄養教育の課題は、日常生活での知識の活用であることを指摘し、小学校家庭科を対象に、知識を獲得、構造化、活用し、それらの思考スキルを獲得し、料理の栄養的特徴から食事の栄養的特徴を判断し目的に合った食事を選択する食物選択力を形成することの重要性を述べている。 第1章では、マルザーノらの「学習の次元」を援用し食物選択力を形成する学習を開発する意義を明確にした上で、食物選択力を形成するためには、「一般化」としての知識、思考スキルが必要であり、知識を獲得する「次元2」の学習、知識を構造化し、その思考スキルを獲得する「次元3」の学習、知識を活用し、その思考スキルを獲得する「次元4」の学習、また、それらが包摂的に展開していく学習の適用が有効であることを考察している。 第2章では、食物選択力を形成する授業モデル及び教材を開発するため、大学生及び小学校5年生の食物選択力の実態を明らかにし、その結果を踏まえ、小学校5年生を対象とした学習計画及び教材を考案し、実証的に検討し、開発課題を提起している。 第3章では、開発課題を踏まえ、食物選択力を形成する授業モデルを構想し、教材の開発を行っている。本授業モデルは、マルザーノらの「学習の次元」の「次元2」「次元3」「次元4」を援用し、食品群、料理の栄養的特徴に関する知識を獲得し、それらを一般化により構造化し、活用して食事の栄養的特徴を判断でき、また構造化及び活用の思考スキルを獲得できるよう構想されている。教材は、いずれも推論活動を通して知識の獲得、知識の構造化と活用、思考スキルの獲得ができるよう考案されている。 第4章では、第3章で構想した授業モデル及び教材を具体化し、授業実践の計画について検討している。本授業モデルは子どもに身近な給食の料理及び献立を題材として第1次 | | | |

から第4次の全7時間で計画している。そして、教材は料理及び食事の栄養的特徴を推論する手がかりとなる「料理－食品群充足率カード」、食事構成と食事の栄養的特徴を推論する4種類のワークシートを開発し、使用している。

5章では、本授業モデルを小学校5年生対象に授業実践し、その有効性及び食物選択力の形成過程を分析している。その結果、食品群に関する知識は約8割強の子どもが獲得でき、料理の栄養的特徴に関する知識も有意に正解率が上昇し知識を獲得できていた。さらに、食品群の種類に関する知識の構造化は約8割強の子どもが可能であり、知識を構造化する思考スキルが獲得されていることを明らかにしている。さらに、食品群の種類を活用し食事の栄養的特徴を推論することができた子どもは約8割で、料理の栄養的特徴を活用し栄養的バランスのよい食事を推論することができた子どもは約8割強であり、開発した授業モデルにより食物選択力の形成が可能であるとことを実証している。さらに、食物選択力の形成過程は、知識（食品群の種類）を獲得し、構造化する「構造化（食品）」、食品群の種類を活用し食事の栄養的特徴を推論する「推論1」、食品群の知識構造を精緻なものにし、知識（料理の栄養的特徴）を獲得し、構造化する「構造化（料理）」、料理の栄養的特徴を活用し、複合的料理の栄養的特徴を推論する「推論2-1」、料理の栄養的特徴を活用し食事の栄養的特徴を推論する「推論2-2」、複合的料理の栄養的特徴を活用し食事の栄養的特徴を推論する「推論2-3」であること、さらに、知識を活用できなかった子どもの躓きの箇所を明らかにしている。

終章では、研究の総括をして、研究成果と課題について述べている。小学校家庭科の栄養教育において、マルザーノらの学習理論を援用して食物選択力の形成が可能となる授業モデルを開発できたこと、推論を通して知識を活用できる教材を開発できたこと、包摂的学習を組み立て、そのための教材を開発したことは、子どもが知識を獲得していても、日常生活での活用に困難を生じていた従来の栄養教育の課題解決に繋がることを明らかにしている。しかし、今後の課題として、授業実践後の経時的な分析、子どもの学び直しの様相の明確化、使用する食品群の妥当性の検討、自由記述による思考に関する評価の限界の克服、子どもの量の捉え方の明確化に言及している。

本研究は以下の点で評価することができる。

第一に、マルザーノらの学習理論を援用することにより、食物選択力を形成する知識の獲得、構造化、活用、そして、知識を構造化する思考スキル、知識を活用する思考スキルを獲得する授業モデルを開発し、その有効性を実証している。開発した授業モデルは、家庭科における他の学習内容での題材開発、教材開発へ応用できる成果である。

第二に、食物選択力の形成過程を明らかにしたことである。これは知識を活用できない子どもの躓き箇所を捉えて指導することを可能とする。

第三に、小学校段階で食品群の量の理解が可能であることを明らかにしたことにより、小・中・高等学校を一貫した新たな栄養教育におけるカリキュラム開発を可能とする。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 27年 2月 10日